

すくも
自主防災会だより
第1号

「自分たちの地域は自分たちで守る」という自覚、連帯感をもとに結成された自主防災組織は、現在、市内で90組織(世帯率で97%)あります。

この組織間の情報共有や連携などの推進を図るため、昨年10月に宿毛市自主防災会連絡協議会が設立されました。

【役員構成】

- 会長 濱田頼之
- 副会長 河野典生
- 副会長 豊島裕一
- 理事

- 宿毛支部 今城秀之
- 西支部 成田好水
- 和田支部 松田且一
- 橋上支部 小松宣男
- 沖の島支部 宮本恒水
- 平田支部 大倉幸男
- 山奈支部 伊与田耕作
- 小筑紫支部 尾崎重幸

7月10日には平成25年度第1回総会が開催され、今年度の活動方針を「防災意識向上のための啓発活動」として広報誌などを活用して、自主防災組織からの啓発や情報発信をしていくことが決まりました。

「真の自主防災に向けて」

地震というのは一つの自然現象です。地球上を常に対流している岩盤が動く時に起きる歪みが起こす「くしゃみ」なのです。毎年やってくる台風などと違うのは、それが予測できない時にやってくる。だからとても不安になるし恐怖も感じるので。でも、だからと言って何をどうしていいかもなかなか思いつきが悪く、少し面倒くさいし：いやなものばかり見ないようにすればいいですか？という心理に陥って、大切な自分や家族の命と安全を何より心配しているくせに、それを担保するすべを自ら放棄するような結果を招いていないだろうか。そう、「あと一歩が踏み出せないでいる人」が意外に多いものなのです。

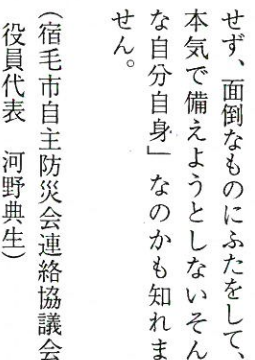
「地震なんていつ来るのかわからないから準備してもしよ



うがない」「死ぬときはみんな一緒だよ」などと、妙にわかったような八方破れなことを言わず、時に平穏な「日常」の行動や精神を「非日常」に切り替えてみるのがとても大切なのかもしれません。四つの巨大なプレートがひしめきあう世界で最も地震の多い場

所のひとつにある日本列島は、阪神・淡路大震災(平成7年)を境に地震の活動期に入ったといわれています。この活動期は静岡県から四国沖にかけて東海、東南海、南海地震の震源が連なる南海トラフ(浅い海溝)で、次の海溝型巨大地震が起るまで続くと考えられています。そこから見えてくるのは、今やるべきことに早急な手当てを施す一方で、30年、40年の先までも見据え、長期戦をも覚悟した「地道な防災文化」の育成なのです。即効性ばかりに目を向けず、子孫にまで継承して防災減災の意識をしつかり根付かせていく、息の長い対策が必要だと考えます。

国難とも言うべきこの災害に直接立ち向かうのは、われわれ自身でありそれぞれの地域なのであって、決して行政ではありません。行政には行政がやらなければならぬ緊要事項があるはず。われら市民がやるべきことのサポートはしても、市民が行うべき行為の代行は決してできないのです。行政の庇護下にじつと首をすくめて時が流れれば、いずれ嵐が過ぎ去ると偉大な勘違いをしていては、この破壊的な大災害から自らの生存を勝ち取ることは難しいと知るべきでしょう。行政の支援を受けつつ、われわれが生きる地域の特性に合致した自主防災組織の自主自立を目指して、ゆるやかでもいいから、しかし、一歩ずつ着実に防災地域力を高める歩を進めていきたいものです。この思いこそが、宿毛市自主防災会連絡協議会の目指す努力目標なのだろうと考えています。



(宿毛市自主防災会連絡協議会 役員代表 河野典生)



皆さん、あなたには守らなければならぬ人がいるはず。そこで、まずは何をすべきなのでしょう。それは自らの生存確率を上げること。言葉を代えれば、被害を受け確率を下げるということです。あなたが大地震の一撃から難を逃れ健在することなくして家族も隣人も救うことなど夢のまた夢。家族全員を一夜にして劇的に地震防災の模範的理解者に仕立て上げることには難しいかもしれません。それならば、まず、あなたが家族をリードする危機管理官になつてくださいます。そして家族を守る心と物の準備に今取りかかりましょう。巨大地震や津波は大変恐ろしいものでも、もつと恐ろしいのは、「見たくないものに向き合おうとせず、面倒なものにふたをして、本気で備えよう」としないそんな自分自身」なのかも知れません。